

釈尊の時代のユーラシア

龍谷ミュージアム准教授 岩井俊平

本展覧会「お釈迦さんワールド―ブツダになったひと―」のポスターは、なかなか目立つ色使いでございまして、書体もポップですから、いったいどんな展覧会なんだと興味を引くのではないかと思います。しかしながら、ポスターやチラシのわりには、そこに書かれている内容や並んでいるものは堅い感じのものでございまして、分かりにくい部分もあると思います。今回は、なんとか分かりやすく、仏教の開祖であるお釈迦さんに迫っていけないかと考えました。そこで最初に設定したテーマは、とにかくお釈迦さんも人間だったんだというところを強調したい、という内容の展示になってございます。

そうは言いますが、実際に人間としてのお釈迦さんの生涯というのは、明確に伝記として分かるわけではございません。皆さまもご存じのとおり、どうしても経典に載っている内容というのは、伝説化されていると言います。ようか、誇張されていると言いましようか、当然、人間とは思えないようなエピソードもかなり多く含んでいるわけです。ですので、どうしても人間としての姿というものには迫っていけないところがあります。とはいえ、なんとかそういう方向で展示ができないかという展示内容を試みたわけでございます。

最初に、この展覧会の見どころをご紹介します。実はこういう展覧会は日本ではあるようでなく、たくさんのお教徒が暮らしている国で、仏教の開祖としてのお釈迦さんにまでさかのぼって特集をするような展覧会は、数えてみますと、だいたい二〇年ぶりくらいになるようです。もちろん小さいスポット的な展示は、これまでたくさんあったと思いますし、龍谷ミュージアムでも、二〇一一年の開館の年、「釈尊と親鸞」というタイトルで展示していますが、お釈迦さんに特に絞ってというものは、なかなか数が少ないのです。これもちよつと不思議な話ですが、あるいは日本の特徴なのかもしれないなとも思います。お釈迦さんは、われわれと同じ人間だったという、身近な感じがしないというところがあるのかなということです。それが理由で、こういう展覧会も少ないのかなと感じております。いずれにしても、意外に久しぶりのテーマになります。今回は、仏教の開祖としてのお釈迦さんの、特に生涯にまつわるさまざまな時代、さまざまな地域の経典、それから仏伝やお釈迦さんの生涯を描いた浮き彫りや絵画といったものを、たくさん集めています。

さらに今年、たまたまなのですが、手塚治虫先生が生誕九〇周年を迎えられるということで、手塚プロダクションのご協力をいただいで、漫画『ブツダ』の直筆原画もたくさん展示しております。これは、後ほど展示室でゆっくりご覧いただきたいと思えます。

さて、この後でご覧いただく展覧会の構成を、ここで簡単にご紹介しておきます。まずは第1章ということで、「お釈迦さんの時代」です。実は本日ここでお話をさせていただくのは、この第1章に関するです。実際に人間としてお釈迦さんが活動していた前五世紀くらいのユーラシアの歴史を、考古学的な出土品からご紹介するのが第1章でございます。

第2章は、まさに「お釈迦さんの生涯」ということで、色々な地域、時代につくられた仏伝図などから、もちろ

人大げさに誇張された人生ではあるわけですが、その生涯というものをあらためてご紹介するという内容です。

そして第3章は「お釈迦さんを追慕する」というものです。具体的には、身近な儀礼が中心となります。例えば四月八日のお花祭り、仏生会、降誕会、灌仏会です。それから十二月八日に行われている成道会です。そして二月十五日の涅槃会です。そういうことで、こういったお釈迦さんの生涯にまつわる儀礼というのは、今も1年を通して行われているわけですので、それが成立していく東アジア世界での様子をご紹介します。

今、挙げました仏生会、成道会、そして涅槃会の三つはもちろん非常に重要なのですが、今回、特にもう一つご紹介をしているのが七月十五日の儀礼でございます。ここに非常に変わったお釈迦さんの姿をご紹介します。江戸時代の絵画ですが、こういったものがたくさん日本には残されておりまして、中国にも残っております。これは、岩の上に草を敷いて、座っておられます。口の周りは少し頬がこけて、ひげを生やして、髪の毛も伸び放題という、ちょっとやつれたお姿です。そして体毛もかなり濃いという、非常に特徴的な、われわれからすれば、ちょっと変わった姿のお釈迦さんということになります。こういった図像が、たくさんお寺に伝わっていたり、あるいは博物館・美術館に所蔵されているということは、昔からよく知られていました。これらの絵画はもちろん図像としては研究はされていたわけですが、なぜこんなにたくさん日本に残されているんだという部分は、実は分かっていなかったところがあるんです。

それが最近の研究で、どうも夏安居に関わる儀礼の中で、こちらを本尊として使用していたらしいということが分かってきました。具体的には、四月十六日、結夏に行われる儀礼です。これは夏安居に入る日の儀礼です。あるいは夏安居が明ける七月十五日の、解夏の儀礼です。そして夏安居明けに行われる自恣儀礼、反省会の意であるところの自恣の儀礼において、こういうお姿のお釈迦さんをご本尊として儀礼が行われていたらしいということのよ

うです。草座（そうざ）、草の座に座するということは、悟りを開いた直後の姿を描いています。お釈迦さんは菩提樹の下に草を敷き詰めて座って、そして悟りを開いたといわれているわけですが、まさにその様子なわけです。

そしてあのときは、ちょうど苦行が終わって、乳がゆの供養をスジャータから受けて、そこで菩提樹下に座って瞑想するわけです。つまり、断食が長く続いた後のお姿ですので、こういった具合にひげや体毛が伸び放題で少しやつれているというのは、そういうお姿を表しているんだろうということが最近に分かってきたのです。こういったタイプの変わったお釈迦さん像が、この第3章では展示をされておりますので、他の誕生仏ですとか涅槃図などと併せて、じっくりご覧いただきたいと思っております。

実際、東アジア圏では四月八日が仏誕会、誕生日として長く認識されてきているわけですが、これも最近、日本では知らない方が結構いらっしゃいます。この展覧会を企画する際に私がちょっと考えたことは、四月八日がお釈迦さんの誕生日であると日本では意外に知られていないな、ということに気付いたときに、しかしその人たちのほとんど一〇〇%がイエス・キリストの誕生日を知っているということです。これは日本の不思議なところでもあるのかもしれないですが、イベント事と結び付いて覚えられているところがあると思いますので、そういうものかなと思いつつ、今回この展覧会に来ていただいた方には、特に若い方にそういうところもぜひ、覚えて帰っていただきたいという思いがあつたのです。そういうわけで、儀礼をクローズアップするような内容を考えていたわけです。

そして第4章ですが、ちょっと露骨な書き方ですが「お釈迦さんの遺骨」です。すなわち舍利ということになります。これは、荼毘の直後から舍利に対する信仰というものはあつたわけですので、各地の非常に手の込んだ舍利容器などを紹介しています。

今回、最初は各章の展示品をご紹介しながら、この場でお話しさせていただこうかと考えたのですが、この場でお釈迦さんの生涯について私が話すなんていうことは、まさに釈迦に説法になりかねません。この言い回しが、こんなに当てはまる場があるだろうかということ、それはやめまして、先ほど申し上げたとおり、第1章の内容を簡単にご紹介する内容にさせていただきましたと思います。

ご紹介いただきましたとおり、私は専門が考古学でございまして、正直に申し上げて、仏教のことは素人ですから、あくまで釈尊が実際に生きていた時代のユーラシアはどういう雰囲気だったんだろう、ということのお話をさせていただきたいと思います。それによってお釈迦さんは、「そうか、こういう時代に本当に人間としてインドで生きていた人なんだ」ということを、少しでも思い出していただければと思っております。

今回は、釈尊の時代と言っている以上、それはいつなんだということを説明しないわけにもいきません。これこそ釈迦に説法かもしれませんが、生没年代については、なかなか確定しようがないわけです。まず、主要な説を最初にご紹介しています。特によくいわれるのは、紀元前五六六〜四八六年であったり、紀元前四六三〜三八三年であったりというところで、日本ですと紀元前四六六〜三八六年、紀元前四六三〜三八三年あたりが頻繁に引用される説かと思えます。もちろん決定的な証拠は存在しませんので、最終的に絶対的にこっちだという決定までには当分至らないだろうと思えます。そういうことで、あまり厳密に言ってもしょうがありませんので、今回は、前五世紀前後、前六世紀から前四世紀くらいをお釈迦さんの時代と位置付けて展示をしております。

会場には地図がございます。お手元の資料ですと色がなくなってしまうと、区別がつかなくなっているかと思えますので、またあらためて会場でご確認いただければと思います。当時お釈迦さんが暮らしていた北インド地域

は、十六大国と呼ばれる都市国家が争う時代です。

そしてこの中東を広く支配していた、当時の最先進国。これがアケメネス朝ペルシャでございます。その西側の地中海世界は、ギリシャ古典期、クラシック、古典時代ということ、古代ギリシャの最盛期ということになるのかと思います。そして中国は春秋戦国時代です。まさに春秋から戦国に移り変わっていくのが前五世紀です。よく見てみると、小さな都市国家がどんどん誕生して、その都市国家同士で争うような時代というのが、この前五世紀前後のユーラシアの特徴ということになります。その中でアケメネス朝ペルシャだけは、すでに統一を果たして、完全に一歩リードしています。リードという言い方もおかしいですが、そういう状態です。この地域は、人類の文明の発祥以来、ずっと最先端を行き続けている地域ですので、この時代においても、他の地域が相争っている間に、完全に統一がなされ、宮廷文化が爛熟するという時代に突入しているということになります。ちなみに日本は弥生時代です。弥生時代の実年代については諸説ありますので、なかなか決定的なこととは言えないわけですが、最近ですと弥生時代の前期が前五世紀前後ではないかという意見が増えてきているようです。

最初は、やはりインドのお話から始めていきたいと思いますが、先ほど申し上げたとおり、部族社会が解体して都市国家が多数出現する十六大国は、大国と言いながら、そんなに大国ではないわけです。都市国家が相争う事態ということになります。こうした中から一番力を付けてくるのが、いわゆるマガダ国と言っている地域で、その後、マウリヤ朝によるインドの統一ということになるわけですが、お釈迦さん、すなわちガウタマ・シツダールタさんが所属していたシャークヤ族は、コーサラ国に従属する小さな部族だったと考えられます。そして、コーサラ、マガダ、この二つが相争うというかたちが後に出来上がっていくことになるわけです。

今回いくつか面白いものを展示しています。展示室でご覧いただいても、いきなり最初に登場して、「なんだ、土器か」と皆さんお思いになるのではと不安なのですが、これはなかなか珍しいものでして、ティラウラコットというネパールの遺跡から出土した土器です。ティラウラコットは今では整備されて、きっちり部分的に残されているわけですが、この遺跡は、シャーキャ族が暮らしていたカピラヴァストウの候補地の一つです。あくまで候補地です、もちろんここではなかったかもしれないわけですが、いずれにしましても、この遺跡を一九六〇年代に立正大学が発掘しています。それによって出土品がいろいろ出て、一部を日本に持って帰ってきていて、大学の方で保管されています。今回、それをお借りしまして、その遺跡の前五世紀くらいまでさかのぼるといふ土器を展示しています。ということは、ここが本場にカピラヴァストウであったなら、お釈迦さんが触ったかもしれないと、多くの方に説明をしているわけですが、もちろん私もそんなことは信じておりません。しかし、少なくとも生きていたシツダールタさんと完全に同時代、そしてほぼ同じ場所で使われていたといふ土器でございます。

さらに同じ時代にさかのぼる、玉類があります。石のビーズですが、こういったものが同じ遺跡から出土しています。これも土器と一緒に隣に並べて置いてありますが、これの面白いところは、非常に小さい穴、特に1ミリに満たないような穴が真ん中に開けられています。これは、もちろんひもを通して首飾りにするとか腕輪にするとか、そうやって使われていたものだろうと思われませんが、この石に、こういう小さな穴を貫通させる技術が存在したことになると思います。これをどうやって開けているのかというところを調べてみると、どうも鉄のドリルの先端に、ダイヤモンドのような硬い石を取り付けて、そして回転させて穴を開けているらしいのです。実際、中を顕微鏡で調べ、回転で開けている様子が確認できる研究が最近になって行われていて、実際にそうやって開けたということが分かっています。つまり、こういったものをつくるのに、鉄の道具が普及を始めているということがポイント

になってくるわけです。都市国家群を生み出す背景になってくる、こういう技術が重要になるんです。当然、農具にも鉄が使われるようになっていって、農耕生産力が増大していくわけです。

そして同時に、この時代に貨幣というものが急速に普及してきます。そうすると、鉄とか貨幣というものをうまく使いこなせる人たちが力を付けてきて、新興勢力になっていくわけです。この人たちは、結果的に伝統的なインドの価値観、ヴェーダの宗教のような、バラモンをトップとするような伝統的な考え方に歯向かっていく、けちをつけていくというような存在になっていくわけです。そうした中で新興勢力の人たちは、ヴェーダとは異なる別の思想哲学がどうしても背景として必要になります。そういう需要があると供給が出てくるわけです。この時代のインドでは、多くの新進気鋭の思想家が登場しています。仏典の中で、例えば六師外道として登場する方々、そしてシッダールタ本人ですね。この人たちは、まさに新興勢力の背景となる哲学を創造していくんです。気鋭の思想家だったんだらうと思います。これがインドの状況ですが、こういう状況が他の地域でも見られるというのが非常に興味深いところです。

ちなみに貨幣というのは、銀の塊に型をがんと打ち付けて、打刻をしてマークを入れるということで、パンチマークト・コインと呼ばれますが、こういうものがインドで実際、この時代に流通しています。地域ごとに文様と異なりますか、図様が決まっていたと考えられております。それ以外に両替商が、自分が両替した証拠に小さいマークを入れていくといったようなことが行われていたらしく、これによって遠隔交易が容易になるわけです。あるいは兵士に払う給料についても、物々交換、あるいは給料として食べ物や物を渡すということも、期限やかさばるといった問題も難しいわけですが、これで交換できるという小さい貨幣を配ることによって、それが容易にできるようになっていくわけです。それによってまた経済が発展していくのです。その経済を後ろ盾にした新興勢力は、より力を持

っていくということ、こういう循環が各地で起こっていったと考えられます。

一方、西側の方から見ていきたいと思いますが、同じ時代の地中海世界ということになりますと、ギリシャの都市国家の時代ということで、アテナイの民主制が人類初めての民主制と考えて問題ないんだらうと思います。ただ、べつにギリシャの都市国家のどれもが民主制を採用していたわけではありませぬし（スパルタなど）、アテナイにしても比較的短い期間で終わってしまいますので、これは特殊と言えば特殊なわけですが、しかし人類史にとつては非常に重要な画期になる時代であつたことは間違いないかと思ひます。

さらにこの時代のギリシャというのは、なんと最先進国のアケメネス朝ペルシャに勝つてしまふという、とんでもない事態を迎えたわけです。まさに最盛期ということ。マラソンのもとになったマラトンの戦い、有名なサラミスの海戦、こういったものも、まさにお釈迦さんがインドで暮らしていた時期に、同時に起こっている事態だということになります。彼らは、一致団結してアケメネス朝ペルシャと戦っていたわけです。しかしその後で、都市国家同士の抗争というものが発生していくわけです。いわゆるペロポネソス戦争という内戦のような事態というのは、同じ時代に、少し後にも起こってしまつて、これによつてギリシャの多くの都市国家は疲弊して、北からやつて来たマケドニア王国が、この地域をその後統一します。そしてこのマケドニア王国からアレクサンドロス大王が出てきて、当時、彼らにとつての世界全部を統一するという流れになつていくわけです。

この時代を代表する建造物は、やはりパルテノン神殿です。こういうものがつくられて、そして文芸や芸術が発達するという時代が、この積尊の時代ということになるかと思ひます。彼らは劇場が大好きで、どんな小さい町にも必ず円形劇場というものがあるのですが、大きなものから小さなものまで、こういったものがどんどんつくられ、そしてここで実際に音楽や演劇が行われるのです。そういう本當に文化的な世界が広がつていた時代だとい

ことになります。

実際に調べてみると、これも北インドと同じような状況の中にあるということになります。もちろん、アケメネス朝ペルシャという、先進国により近いということもあって、インドより少し早い段階でこういうことが起こっているようです。鉄器の普及に伴って、ギリシャは各地に植民都市を建設するようになります。そしてやはり貨幣が流通し始めて、遠距離交易、そして傭兵への給金といったようなことで利用されていきます。その結果エリート市民層、要は働かなくてもいい人たちがというのが登場してくるわけです。これは、やはり鉄の普及、貨幣の普及による経済的な発展が大きな原因になるわけです。働かなくてもいい人たちは、十分な時間の余裕を持って物事を考えることができるということで、多くの文芸家、哲学者、思想家が輩出されていくことになるわけです。

しかしそれだけということも無いと思いますので、もう少し具体的に、あれだけたくさん、それこそソクラテスやヘロドトスといった人たちが出てくる本当の理由というのは、なかなか分からないわけです。大きくは、こういうエリート市民層の台頭によって、時間に余裕ができるということが非常に大きいかと思えます。そういう意味では、ソクラテス、ヘロドトス、ピタゴラス、そういったわれわれのよく知るギリシャの人たちは、お釈迦さんと同じ時代にギリシャで、思想的な活動を展開していたわけですので、本当に同時代性というものは恐ろしいと思います。

今回展示をしておりますこの時代を代表するギリシャの考古学的な遺物といえば、陶器です。ギリシャ陶器と一般に呼ばれますが、ギリシャ神話に登場するような英雄や神々が描かれています。そういういろんなタイプの器があります。今回はそういったものを展示しています。基本的には、在地で使われるということと、遠距離交易の際に非常に重要な交易品として大量に生産されていたものです。

それと貨幣です。貨幣もインドと同じように都市ごとに決まりがあつて、例えばアテナイですと、表はアテナ女神の姿です。そして裏は、聖鳥であるフクロウが打刻されています。これは、「AΘE（アテ）」というふうには、ギリシャ文字で最初の3文字が書いてあつて、アテナイで発行されたということが分かるようになっていゝるわけです。面白いのは、シュラクサイという都市国家で発行されていたもので、イルカが表現されています。シュラクサイというのは、今のシラクサです。そういう意味では、イタリア方面まで貨幣経済が前五世紀くらいに広まっていたという証拠になつてくるわけです。

そしてその隣にあります、先ほどから最先進国と申し上げているアケメネス朝ペルシャです。ここは、非常に先を行つてゐる地域だったわけです。特にダレイオス一世の時代です。この方は、お釈迦さんと同時代の方ということになるかと思ひます。今に続く、広域国家をどういふふうには統治していくか、そのシステムを實質的につくつた人物で、現代にも残つてゐる国家統治システムをつくつた人物と言つても過言ではない、人類史にとつてものごく重要な人物ということになるかと思ひますが、この方は、お釈迦さんとまさに同時代に生きて政治を行つていた人だということになります。

「帝国」の基準と言ひますか、定義というものも非常に難しいです、なんとも言へませんが、意図的に、しかも長い期間、広い範囲で支配し続けたという意味では、人類史上最初の世界帝国と言つてもいいのが、このアケメネス朝ペルシャだろうと思ひます。先ほど見た地図ですが、かなり広い範囲を押さえて、インド側にもどんだん支配の手を伸ばしていくということになります。

最も有名な建造物としては、ペルセポリスが挙げられると思ひます。しばしば首都という言ひ方がされたりしますが、おそらく町というよりは、王権に関わる儀礼が行われていた、国内にあるいくつかの拠点の一つなんだろう

と思います。広大な敷地の中で、さまざまな建物が建てられています。このような柱に動物の姿が乗っています。これは、その後のインドのアショーカ王が建てた、アショーカ王柱のモデルになったものです。そしてこういった浮き彫りです。帝国の王に貢ぎ物を持ってやって来る各地の民族の姿が浮き彫りにされているという、非常に壮大な場所です。特にこのライオン、獅子は、アケメネス王家の紋章の一つともいわれ、他の動物を襲う姿、あるいは他の造形物にそのように表現される場合、アケメネス朝の文化にはライオンが多々登場する場所があります。そしてなんと、言っても文字がかなり多く残っております。幸いにして、有名なベヒストウン碑文などもそうですが、アケメネス朝ペルシャの歴史を解説することができるといことになります。そういう意味で、このアケメネス朝ペルシャこそが、この時代を代表する先進国であり、研究も非常に進んでいるところがあるのですが、なぜか日本の世界史の教科書だと割かれるページが非常に少ないのです。これは、根本的に日本人の研究者が少ないところもあって、伝統的に、中国の同じ時代、それこそ春秋戦国時代、それから先ほど紹介したギリシャ古典時代に比べると、なんだかあつまりり説明が終わってしまうのですが、間違いなくアケメネス朝ペルシャとは、この時代、お釈迦さんの時代において、最も重要な国だったと思われれます。

実際、鉄器に関しては、ここは前一二〇〇年くらいから、かなり普及が始まっていますし、貨幣についても、世界最初の流通貨幣として金属の塊のようなものを使い始めた、リュディア王国を併合するのがアケメネス朝ペルシャです。そのシステムをそのまま踏襲します。そういう意味では、ギリシャ世界、あるいは中国、インドよりも、一足先に貨幣の流通が始まっている地域となります。

思想・哲学という点で言いますと、ゾロアスター（ザラスシュトラ）が挙げられます。生没年はお釈迦さん以上に謎めいておりまして、なんとも言えないところがあります。近年ですと意外とさかのぼらせて、前十世紀くらい

には、すでにザラスシュトラが登場して、いわゆるゾロアスター教の基本になるような二元的な考え方を提示していたのではないかと言われるようになってきています。しかしこれについては、ちよつと時代が分からないというところがあります。いずれにしろこういう方が登場し、前五世紀の段階では、こういった宗教的なものかなり固まっているのが、この地域ということになります。

余談になりますが、いわゆるバビロン捕囚からユダヤ人を解放したのが、このアケメネス朝ペルシャ、キュロス大王ですが、この解放によつてユダヤ人はアケメネス朝の統治下で暮らしていくことになります。その中で、いわゆる今のユダヤ教につながっていく教義というものが醸成されていくことになります。これは完全に仏教と同時代に思想が形成されていくということです。これもまた、同時代性という意味では、前六世紀から前四世紀という時代の非常に面白い部分かなと思います。

今回、アケメネス朝のもので展示をしているのは、例えばリュトンです。銀でつくつて、非常にリアルなウマの姿が表現されていますが、実は穴が開いていて、液体を入れても、どんどんこぼれてしまうのです。リュトンというのはいくつもの穴を指で押さえて、飲むときは指を外して、そして小さい穴から飲むわけです。こういった、お酒をすぐ飲み干さないと置けないし、手を離したらこぼれてしまうという容器は、丸底の器など世界中にあります。この地域の場合、このリュトンがそれにあたります。このような穴が開いている器というものが広く出土します。

あとは鉄の剣です。ハート形のつばのあるものはアキナケスと呼ぶのですが、これは、もともとアケメネス朝にとつては北方にあるスキタイ、当時あのヘロドトスが記述している遊牧集団がいましたが、彼らの中でよく使われていたタイプの剣です。スキタイとアケメネス朝ペルシャとの戦争の中で、こういう剣がアケメネス朝ペルシャの

中にも広まって一般的になってきます。いずれにしろ鉄の武器というのがこの地域では使用され、当然、農耕具も鉄のものが使われるようになっていくのです。

次にガラスです。この時代は、まだいわゆる吹きガラスという技法ができていません。あれはローマ時代になって初めて発明される方法ですので、コアガラスという非常に手間のかかる方法でつくっています。ですから、ものすごく貴重品なわけです。しかし香油を入れたり、あるいは化粧品を入れたりする道具として、宮廷文化の中で広く、このアケメネス朝ペルシャではガラスの容器が使われているということになります。

それから、銀の器で、釉薬で色を出した焼成レンガもあります。これが王宮の壁を飾っていたわけです。

それと金貨です。アケメネス朝の場合、非常に純度の高い金を使って発行していました。実はヘロドトスの『歴史』の中で「ダレイオスは極力純度の高い金で貨幣をつくらせていた」という記述がされています。実際に調べてみると、本当に99%、ほぼ純金という金が使われていることが判明して、ヘロドトスの記述は非常に信じよう性が高いんだということを示す材料にもなっているわけです。今回、こういったものが展示室の中にはございます。

そして中国です。この時代、春秋時代から戦国時代ということになります。まさにインド、それからギリシャに近い状態ということになると思います。特に春秋から戦国時代に入りますと、今まで周王朝の王のもとで諸侯を名乗っていた有力な人々が自ら王を名乗るという事態になってきて、これは混乱の極みという状態になっていきます。

どうしても戦国時代という名前から、われわれは日本の戦国時代、戦国武将が出てきて、群雄割拠というイメージを持ってしまいますが、この当時の王というのは、本当は一人しかいないのです。周王朝の周王室の王のことで、全員が王を名乗るという事態は、ちよつと違うのですが、日本風に言えば戦国武将が全員天皇を名乗っている状態ということになりますので、想像を絶するような大混乱の時代ということになるのだらうと思います。

ご存じのとおり、この中から秦が強勢となって、前二二一年には中国統一ということになるわけです。インドでもマウリヤ朝がようやく統一するのが前三世紀、そして中国でも前三世紀の後半、そしてギリシャでもマケドニアが入ってくるのが前四世紀ということになりますので、ようやくギリシャ、そして中国、インドでは、大混乱の後に統一国家がつくられるわけです。この統一という事態に、アケメネス朝はずっと前に入っております。この前五世紀の段階では完全に統一されているという状態ですので、比べたときに、やはりアケメネス朝が先を行っているのだということが分かるかと思えます。前四〇三年以降、完全に戦国時代に入った中国では、周王朝、王室の権威がとことん弱まって、それぞれの国が群雄割拠していくという事態になるわけです。その状況を調べると、先ほどから言っているように、本当に一緒なんです。鉄製農耕具の普及で農耕生産力が増大してきます。これはギリシャのエリート市民層が台頭してくるのと一緒で、一次生産に従事しなくていい都市民が育ってくるということになります。そして貨幣の普及、それを背景にした特に商工業者たちの台頭ということが発生してくるわけです。

中国の場合、特に中国の貨幣に関してはいろんな研究がございますので、年代に関しても本当に諸説あつて、なんとも言い難いところもあるのですが、近年の研究ですと一番最初の貨幣というのは、民間で交換の便利のためにつくられたものではないかと言われています。最初の貨幣というのは、尖首刀と言っているもの、それから空首布と言っているものですが、中国の場合、青銅なんです。刀の形をしてたり、農耕具、鋤か何かだと思いますが、そういう形をしているものです。空首というのは、柄の部分は普通、空洞になっています。これは本来、非常に小さいものですが、農耕具だったらもっと大きくて、そして空洞に木の柄を差し込んで、道具として使っていたわけですから、それがミニチュア化しても、柄の部分を空洞化するという伝統が残っているのでこれが古いものだろうと思われまます。その後、この形が扁平なものになっていきますので、これが当初のものだろうと考えられますが、ブ

ロンズ、青銅の貨幣がこうやって流通するというのが、中国の特徴ということになります。

インド、それからアケメネス朝、そしてギリシャ世界で流通していたものは、金貨か銀貨のどちらかです。これは貴金属ですので、その金属の重さが、そのまま価値の証明、価値の担保になるわけですよ。ところが中国ですと、青銅という比較的貴金属と言えない、金属としての価値が低いものが、こうやってお金になっていくというのは、非常に特殊だなと感じます。しかし中国の場合、古くからロンズに対する圧倒的な信仰というものがあります。実際、他の地域で鉄の武器が広まっても、中国の武器は、秦の統一くらいまでほぼ青銅のままです。技術がなかったという考え方もできますが、一方で命のやりとりをするような場所で、彼らは青銅というものに何か神秘的な、呪術的な意味合いを持たせていたのではないかと気がしますが、貨幣でも、あるいはそういうこと言えるのかもしれませんが。その後、秦の段階、いわゆる半両銭、この円形方孔と言っているタイプの貨幣が登場して、これがその後、スタンダードになります。日本でも、このタイプの貨幣が発行されるようになるということになります。

こういう状況、鉄の普及による農耕生産力の増大、貨幣の普及による経済力の増大という結果として、伝統的価値観、いわゆる礼制と言っているものですが、周王朝を頂点とする封建制というものが動揺していきます。より身分の低い人たちまで同じような儀礼が行われるようになっていくのです。こういうことになっていくと、そうした周時代の価値観に戻そうという動きと、一方で、より新しい状況に向かっていこうという新興勢力という両者が出てきました、その人たちの思想を支える思想家が出てきます。中国の場合、この人たちは諸子百家と呼ばれるわけです。

今回展示をしているものの中には、いわゆる「鼎(てい)」と呼んでいる青銅器があります。殷の時代から、た

くさんつくられています。特に鼎に関しては、墓に埋めていい数が身分ごとに決まっていますので、身分制度と非常に深く関わる青銅器なわけですが、こういったものが、ちょっと言葉は悪いですが、手抜きになっていくという流れがあります。あとは、今までに伝統的には存在しなかった器形というものが登場してくるのが、この時代です。さらには、伝統的な形を、青銅をやめて土器でつくってしまうのです。模倣して、少し単純化していくという流れがあるんです。こういったものが、より身分の低い人たちの墓から出てくるということになると、より広い人々の中でこういう儀礼が広まっていった、今までトップの連中が独占していた価値観、儀礼の重要な部分というものが、あまり専売特許的なものではなくなくなっていく。いろんな人がそれを模倣できるようになっていくということが、より下の身分の人たちが台頭してくるということになるんだらうと思います。

そして玉です。中国の方々が本当に昔から重要視してきたものですが、こういう玉器にも同じ事態が起こっています。より身分の低い方の墓からも、こういったものが出てくるということで、青銅器、玉器という、中国の儀礼をつかさどる文物を調べることによって、この時代に伝統的な価値観というものが揺らいで、そして諸子百家のよいうな人たちが登場してきたんだらうということが分かってくるわけです。この時代、それこそ孔子や、老子については実在を疑う向きがもちろんたくさんございますが、ただ、老荘思想のもとになる考え方を提示した人物というのは必ずいるはずで、そういった人たちがおそらく登場した時代なんだらうと思います。あとは、兵法で有名な孫子ですね。こうした方々は、やはりこの時代に中国に登場して、新しい考え方を興していくということになります。このように見ていくと、アケメネス朝ペルシャという統一国家が先進国として存在する周辺では、非常によく似た状況が広がっているということが分かってくるわけです。その背景には、当然、鉄の普及と貨幣の普及という大きなキーワードがあろうかと思いますが、しかしそれにしてもユーラシアを通じて、こんなによく似たような状況

になるんだらうかということが、やはり疑問になるわけです。

これは遊牧民という存在を見ていくと、解決できる問題ではないかと感じています。この部分は展示にはないのですが、北側を占める草原地帯にヘロドトスがスキタイと表現した集団がいました。彼らが一つの血縁集団であったりするわけではなく、いろんな集団が混ざって、それをヘロドトスはまとめて大きくスキタイと呼んでいるわけですが、彼らの存在がかなり、ギリシャの文化、ペルシャの文化を、さらに広い範囲に広げているという気が致します。実際、パジリク古墳というアルタイにある古墳ですが、こういったところにも同じ時代、前五世紀くらいの文物が埋められているということで、彼らの機動力でもって文物が広がっているのだろうと考えられます。

これはパジリクの古墳の図面ですが、盗掘孔から水が入って、凍って、有機物がごとく残っていたんです。たとえば馬車など、凍った状態で本当にそのまま残っていたんです。ここから出土したものをみていくと、ギリシヤやペルシヤに影響を受けたような図様を伴うくらを覆うフェルトなどが知られています。あるいはしばしば世界最古のじゅうたんなどという言われ方もしたりします。

また、壁掛けなのか何なのかよく分からないのですが、王権神授の場面を表したものが、こういったものの中で出てきているということで、彼らの存在を考慮に入れば、よく似た状況がユーラシア中に広まるという事態を整合的に説明できるような気がします。もちろんここで話している内容は、非常に大ざっぱに、細かい研究を一切参照せずにぶった切って大枠を話しているだけです。「いや、それは違うよ」という意見は多々あるかと思いますが、全体としては、こういう状況が広がっていたと考えられます。

最後に「この頃の日本列島」というところを紹介しておきたいと思えます。讚良郡条里という大阪から出土した弥生時代前期の土器で、いくつかを実際に展示室で展示しております。この土器が出た層位から出土した別の炭化

物から、いわゆる放射性炭素年代測定というものを行ったときに、だいたい前六世紀くらいという年代が出ています。ということは、この弥生時代前期とわれわれが言っている時代というのが、このお釈迦さんの時代に日本では相当するのだなということになります。大陸からはかなり遅れてと言いますが、まだ鉄どころか青銅器もほぼないという時代です。定住農耕が広まり始める時代ということになります。日本ではこういう状況だったということになります。ただ、弥生時代の絶対年代については、今まさに議論が活発に行われているところですので、なかなか絶対にこの年代ですとは言にくいところがあります。

最後に簡単にまとめをしておきたいと思いますが、この人類史にとつての前五世紀、つまりお釈迦さんの時代というのは、何度も申し上げているとおり、鉄器、貨幣、こういう新しいものが普及して行って、それを担った勢力が台頭してくる時代なんだということになるかと思えます。その結果として、やはり新興勢力というのは、常に保守的、伝統的な勢力にけちをつけていく側ですので、伝統的な政治・宗教的権威というのが揺れ動いていく。この変化する世界に対応するために、どうしても新しい考え方、思想・哲学というものが必要になってくるということになるわけです。

そうした中でインドでは、シッタールタであったり、あるいはジャイナ教などが登場してくるわけですし、ギリシャ世界では、ヘロドトスやピタゴラス、ソクラテス、そういった人々たちが出てくるし、中国では、孔子、老子、孫子といったような諸子百家が登場してくるということ、いつてみれば時代に対応して同時多発的に新進気鋭の思想家が登場してきた時代が、こういう前五世紀ということです。お釈迦さんも、その新進気鋭の哲学者の一人として、人類史の中で活躍した人間だったんだということが言えるのではないかと思います。

こういつたことで、人類史と言いますか、人類の発展において、思想・哲学は絶対に必要な部分なんだろうと、この歴史を見ても感じるわけですが、新しい技術が登場してくるという意味では、現代という時代も同じなんだろうと思います。AIが登場したときに、じゃあ、人間の倫理というものがどうなるかとか、それこそiPS細胞でノーベル賞を取った山中教授は、あのiPSのセンターに倫理的なことをサポートする専門の研究者が必要であるということをおっしゃっていますが、やはりああいう新しいものが出てきたとき、それをわれわれはどういうふうに考えるのかという、その思想・哲学が必ず必要になってくるのだらうと思います。なかなか、今の日本の政策では、こういった文系の学問にはお金が回ってこないのが現状ということ、難しいところもあるわけですが、こういった思想・哲学こそ、われわれが今後、真剣に考えていかなければいけないことなのかなというふうに、今回の展示の準備をして感じたところでございます。

すみません、ちょっと長くなってしまいましたけれども、これで私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(終了)